

第一章 考古学からみた山科

図一 中臣遺跡出土ナイフ形石器と石核・剥片



山科盆地北半中央にある栗栖野台地上に中臣遺跡がある。一九六九年に発見され、一九七一年から発掘が続けられた。一九六八年調査の大宅廃寺とともにこのころより、文献史料には残らない山科の歴史が次々と明らかになった。

一 旧石器・縄文時代の足どり

山科盆地で最も古い人たちの足どりは、中臣遺跡中央から出土した旧石器である。鹿児島県の始良火山灰あいらが降るより古い三万年前にさかのぼる。京都市で本格的な旧石器の発掘はこの一例限り。一九九四年調査で慎重に粘土層を掘り下げ、チャートも混じるがサヌカイトが主体の石器群であり、中には瀬戸内地方に特徴的なナイフ形石器があった(図一)。径四メートルの石器集中区もあった。旧石器末では、中臣・旭山遺跡の有舌尖頭器がある。

は縄文時代早期の左京区上終町かみはてちょうにある。径二・八メートルの楕円形の平面、深さ〇・一五メートルと浅く、単純な枝掛けの屋根であったろう。同じ早期の押型文土器は中臣遺跡でも出土する。氷河期が終わり、そのあと最も温暖になった前期のものは今のところ山科盆地では見あたらない。しかし、海水面が上昇した時代でもあり、高い場所にある山科の生活は続いていたはずで、山の幸は多く実ったことであろう。中期後半になって、盆地南東の日野谷寺町で石囲炉いりが見つかる。中期末では中央部の中臣・勧修寺、その東南の醍醐寺境内・日野谷寺町など、盆地各所で点在する。後期では東の大宅遺跡でも確認でき、晩期に土器棺墓がある。さらに北の芝町

遺跡、安祥寺下寺遺跡には埋甕がある。中臣遺跡では竪穴住居や埋甕、落ち込み、土壇・柱穴、多種多様である。

二 弥生・古墳時代と古墳

西に旧安祥寺川、東に山科川にはさまれる中臣遺跡は、引き続き弥生時代も前期から後期、さらに古墳時代、ひいては室町時代、現在まで足どりがつづく中核的な存在である。弥生時代では中・後期の方形周溝墓や土壇墓が多くある。遺跡南側の低地に多く、中でも二〇一〇年調査の後期末の辺九メートルの大きな焼失竪穴住居が目される。数ある住居からは摂津、河内の庄内式や近江系の出土土器がみられ、南方の地域よりも近江との交流が強いように評される。このことは古墳時代中期の五世紀までは、中臣遺跡のなかでもまず東の山科川沿いの東側の遺構がより濃密になることから、近江ルートが中心だった。

目立った前期古墳は今のところ山科にない。しかし視野を広げると、東山丘陵南端には長さ一四〇メートルほどの大墳丘と目される黄金塚二号墳が一号墳とともに並ぶ。二号墳は古墳時代前期の四世紀後葉の円筒埴輪や盾形埴輪が列をなした。埋葬施設は粘土槨とされ、小札革綴冑・刀子とうすを副葬する。大和から巨椋池そして近江に向かう玄関口に立地し、同時にそれは山科の玄関口でもあった。

五世紀中ごろから中臣遺跡の山科川にそう東斜面に方墳群がつくられた。後期の六世紀後半には旧安祥寺川の西斜面に中臣十三塚とよばれる古墳群がある。

前者は一九九八年調査で古墳が九基と木棺墓三基が検出された。低い墳丘のものは周溝のみが残った。円墳の可能性のある古墳二基以外は、いずれも方墳である。墳丘の大きさは辺一〇メートル、周溝幅が二メートル以上のものと、六メートル前後、幅一メートルのものにわかれる。二重周溝のものも一基ある。出土須恵器から五世紀中ごろ、五世紀後半から末の築造と分かる。他の調査では、五世紀代をはじめ、六世紀中葉から七世紀初めの土壇墓もある。一九八六年の調査では円筒埴輪も出土する。

六世紀後半以降になると、後者の中臣十三塚古墳群の横穴式石室を中心とした古墳が旧安祥寺川沿いの西側に集まる。現地には宮道古墳、折上神社稲荷塚古墳などの円墳が残る。新十条の道路建設（七〇―二次）で調査された横穴式石室からは須恵器の杯などが出土し、山科区役所のロビーに展示されている。これら上流側にも花山神社古墳などがあり、さらに北の天智陵古墳のあるエリアと河川を通じて一体化する。このことから、山科及び中臣氏の中心はこのあたりに移った。さらに、上流に火力となる森林資源を求め、後で触れる須恵器や製鉄などの手工業生産の拡大をめざした。飛鳥時代の七世紀に至っても、中臣遺跡では遺跡全域で竪穴住居や掘立柱建物を認めることができる。

盆地東側の醍醐廃寺境内では五世紀代の円筒埴輪片が出土する。古北陸道、奈良街道沿いの北方には、大宅・向山・中鳥井・大岩といった古墳も並ぶ。大宅古墳は大宅廃寺境内で横穴式石室を発掘したものだ。南側の丘陵をへだてて丘陵南斜面に石室がならぶ醍醐古墳群が一九八〇年代に調査された。今は耳塚古墳の碑が東山高校グラウンドの北の丘陵上にあるが、これは二〇基以上からなる古墳群であった。無袖の横穴式石室と幅〇・五メートル前後の小石室の方墳を含むが、主体は、幅一・一・五メートルほどの両袖や片袖式の横穴式石室の円墳である。杯・蓋・高杯・壺・提瓶などの須恵器、釘・刀子・鉈・金環・銀環などが出土する。飛鳥時代に入る七世紀初頭を中心にして築かれ、七世紀後半には追葬もある。

これらの北方には、大型墳が盆地東部の山裾、大塚西浦町にあったと伝えられる。現在の大塚付近、大塚村の中に古墳が数基あったらしい。そのうち山科大塚古墳と呼ばれるものは径二〇メートルほどの円墳で、内部に石棺のようなものがあったという。

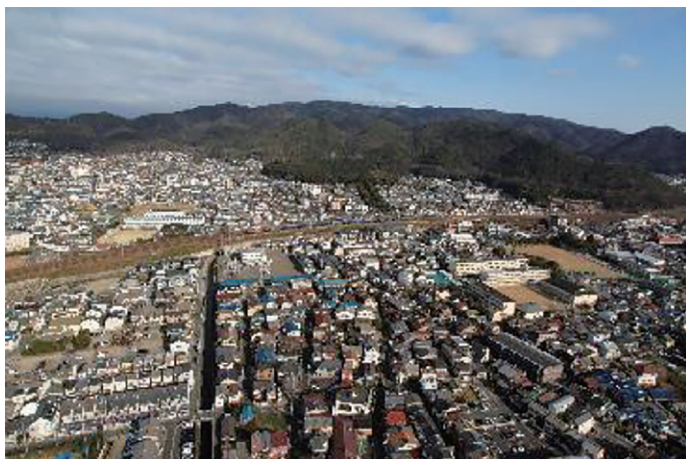
西側の東山丘陵の尾根南斜面京都市中央斎場建設で旭山古墳群が一九七七・七八年に発掘された。二九基以上の古墳からなり、七世紀前葉―中葉に築かれる。辺一〇メートルの方墳で両袖式横穴式石室のもの、辺五・七メートルの無袖式のもの、墳丘のない単葬の小石室がある。石室は幅が一メートルに満たない幅細いものが

多い。金環や須恵器・土師器、鉄釘・刀子が出土した。つづく花山山陵にも古墳が多い。平安京を一望できる大日堂には径四〇メートルもの円墳があり、周囲には箱式石棺などが群集する。西斜面を下ると高台寺境内には辺三〇メートル、五世紀中ごろの八坂方墳がある。山科盆地の西に接する東山の尾根上には古墳が多い。そのすぐ南は鳥部野^{とりべの}と呼ばれ、後の平安時代には一大葬地となる。陵墓地内には古墳が残る他、伏見稲荷山古墳群が残る。さらに南の永井久太郎古墳を含む桃山古墳群では、丘陵裾の伏見城下町や本丸があった現在の明治天皇陵内にも古墳がある。南端の京都橘中学・高等学校の建設時に五世紀後葉の円筒埴輪片が出土し、黄金塚古墳群に並んで丘陵端の古墳が点在していたことがうかがえる。

三 天智陵古墳とその周囲

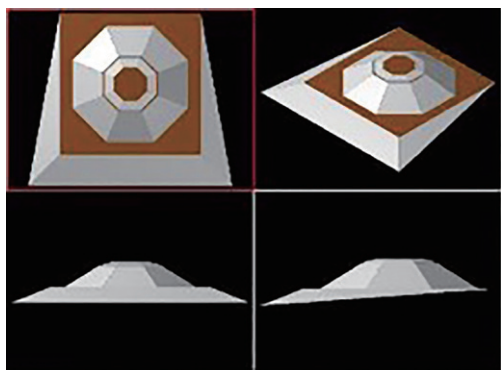
さて、山科盆地の北には七世紀後半に築かれた天智陵古墳がある。背後にある大岩古墳は単独の円墳とされるが、その周囲の凹状の落ち込みには岩が散在することから、斜面に古墳が群在していたのでないかと言われる。その付近に、六七一年の崩御の翌年、天智天皇の陵ができたという。その陵の兆域には安祥寺山も入るようだ。「陶田里^{すえた}」という条里の北方に現在の天智陵と目される古墳がある。一二世紀に至っても山陵として扱われた。現在でも陵墓守の形態が引き継がれる希有な存在である。墳丘は総じて上円下方墳、墳頂付近に切石が八角形にめぐる。奈良県飛鳥周囲にある舒明陵古墳以降の大王級の墳墓が八角形であることから、八角墳と解釈できる(図三)。立地も飛鳥地域の終末期古墳に多い、いわゆる山よせであり、両翼となる丘陵とともに墳丘の三方が山地に囲まれる。その兆域は背後の山のみならず、東西の丘陵まで及んだであろう。墳丘本体の対辺長は、四一・四メートル、高さ八・二メートル、方形基壇と言うべき下段の辺は六三・七五メートル、高さ二メートルの大きさである。墳丘にある石材の多くはチャート、他に粘板岩や花崗岩もある。八角の南辺には「沓脱石^{くつめいし}」と呼ばれる二・三×一・九メートルの巨石が埋まる。

図二 天智陵古墳航空写真



天智陵古墳のある丘陵一帯には飛鳥時代の須恵器窯跡がある。本格的に発掘された日ノ岡堤谷^{つぎたに}には須恵器の窯跡が古墳西の丘陵に築かれていた。丘陵斜面の岩盤をトンネル状に切りぬいた地下式の長さ七メートルの窖窯^{あながま}である。床面は岩盤をそのまま用い、その上部の剥落についてはスサを混ぜた粘土補修が見られた。杯・壺・甕・瓶などが出土する。「×」やコンパス文、漢字の「奉 田田 加 米(カメ?)」といった刻文がつく。これらは七世紀中ごろに近い年代のもので、同時期の窯は南南西の丘陵裾の大峰や朝日稲荷のものがある。さらに天智陵古墳の北方には後山科陵、御陵大岩町といった製鉄遺跡が知られ、大塚遺跡では鉄滓・羽口が確認される。こうして旧安祥寺川水系の上流域では一大手工業地帯に発展させようとした形跡がある。しかし、そこに天智陵古墳を誘致したため、盆地北半の土地利用が制限されるに至ったであろう。

図三 天智陵古墳墳丘復原



四 盆地南半の古代寺院

天智陵古墳の築かれた七世紀後半、盆地北部に対して南側の開発が目立つようになった。山科には古い時期の寺院はないが、遅れて白鳳寺院が現れる。

山科川左岸で大宅廃寺、小野廃寺、醍醐廃寺、対岸に法琳寺がある。これらは天智陵古墳の設定と同時期に出現し、連動したのかもしれない。

盆地東の京都橘大学に接してある大宅廃寺は、一九六八年の名神高速道路建設に先立って発掘された。日本における道路開発に伴った事前発掘の先鞭としても名高い。乱石積み基壇の中央礎石建物（講堂）と中軸をそろえた北方礎石建物（僧坊か）がある。二〇〇三年からの調査で中門と中央建物との間に二棟の瓦積基壇の建物（塔、金堂か）が中軸線上をはさんで東西にならぶことがわかった。観世音式また法起寺式の伽藍配置とされる。中心伽藍の瓦積基壇などは近江の影響をうける。この北山城ではじめて雷文をめぐらす複弁八弁蓮華文の紀寺式軒瓦を使い、そして鋸歯文をめぐらす藤原宮軒瓦を、藤原宮より早く用いた七世紀後半の拠点的な寺院ということになる。これに付随する創建瓦窯と目される長さ二〇メートルをこえる登り窯である大宅廃寺瓦窯が南側の谷をへだててある。一方で一九九一年に、八世紀後半のロストル式平窯が名神高速道路側道の埋設管工事の際に確認された。これは補修用の境内瓦窯であろう。

南西の小栗栖^{おぐるす}北谷の法琳寺は一九九九年以降の発掘で六個の礎石を検出、瓦葺き礎石建物の存在が明らかになった。軒丸瓦には線鋸歯文縁複弁八弁蓮華紋の法隆寺式、単弁一二弁、そして大宅廃寺と同範の雷文縁がある。軒平瓦には三重弧紋がある。七世紀第四半期に建立され、九世紀代まで存続したようだ。同時に調査された法琳寺瓦窯跡は半地下式有牀式の八世紀後半のものである。近くに小栗栖瓦窯もある。盆地向かい側の山背醍醐廃寺の軒丸瓦では雷文縁が多く法隆寺式は少ない。軒平瓦は四重弧紋である。

五 平安時代の古墓と寺院

平安時代になると、『清水寺縁起』の記載から、八一年死去の征夷大将軍の坂上田村麻呂の墓ではと目される盆地西側^{にしがわ}、滑石越^{すべりいし}の斜面中腹に位置する西野山古墓がある。一九一九年に発見され、木棺周囲に木炭をめぐらす木炭櫛で、その上に盛土される。出土遺物には三位以上の品と目される金装大刀一口、革帶飾石片、金銀平脱^{へいだつ}双鳳文鏡一面があり、他に鏡奩片二箇、刀子、鉄板二枚、瓦硯、陶製水滴、刀子、鉄鏃、鉄釘がある。

九世紀後半の同じような木炭櫛が、北部の旧東海道沿いに安朱・安祥寺^{あんしょうじ}下寺遺跡で、地下鉄建設に伴って一九九三年に調査された。遺跡自体は飛鳥・鎌倉時代のものがあるが、木炭櫛は東西に長い三・四メートルの四角い土壇の底に炭をおいてその上に木棺を、周囲に炭をまわす嚴重なもので、墓壇全体の上には水平に縞状に版築して積み重ねた土に覆われていた。櫛内からは白銅龍文の破鏡・黒と赤の乾漆製品・土師器・釘が出土する。

九世紀中ごろに、真言系密教寺院の安祥寺がつくられた。天智陵古墳の背後の丘陵をのぼった標高三五〇メートルに安祥寺上寺跡がある。一九七八年に二個の礎石と須恵器、布目瓦が見いだされた。平安時代の安祥寺は醍醐寺と同じく山上伽藍である上寺と山下伽藍の下寺があった。上寺は急斜面中の平坦部をつくり、二〇〇二年の測量調査で、南北に並ぶ東西幅二一メートルの礼仏堂と東西幅二四メートルの五大堂を中心に、東西僧房、三間の礎石方形建物といった施設の痕を確認している。

六 中・近世の城郭型寺院と石垣石材採取場

山科本願寺は北部の四ノ宮川と旧安祥寺川を東西両側に利用し、応仁の乱の後の一四七八年に造営がはじめられた。結果として、寺域は南北一キロ、東西〇・八キロの大きさに及んだ。東海道新幹線敷設で遺構が確認され、一九七三年以降、数多く発掘される。三郭あり、堂舎がならんだ御本寺^{ごほんじ}、家臣や僧侶が住まう内寺内^{うちじない}、職人・商人が住まう外寺内^{そとじない}で、それぞれに土塁がともなう。幅が一二・一五メートル、高さ五・六メートル。周囲に堀が幅五・一二メートル、深さ三・七メートル、土塁下には暗渠排水溝が設けられた。御本寺南東の発掘では、大甕が埋められた建物や炉跡があり鍛冶をしていた建物を検出する。一五三二年の本願寺焼き討ちのときであ

ろうか、焼土や焼けた土器・瓦が出土する。中国・龍泉窯の青磁・景德鎮の五彩磁器をはじめ、染付・白磁・天目等の中国をはじめ東南アジア、朝鮮半島からの輸入陶磁器、ガラス玉、金製刀子の鯉口、中国製合子・盆など、国際色豊かである。

御本寺の中枢部西端、南北方向の土塁に沿って、四・四×六・〇メートルの室の中で蒸気をだす石風呂があった。階段のある東方に並んで竈、その南に土間、北に井戸がそなわる。これら周囲を石組溝が囲み、その南に通路があった。南東には阿弥陀堂、御影堂、書院の存在も考え、一帯は史跡整備計画地となっている。他に、山科中央公園にクランクに折れまがる土塁が残る。

山科本願寺（北殿）の東方、音羽伊勢宿の光照寺を中心にひろがる南殿跡がある。北東部の一部が史跡である。一五〜一六世紀の間、本願寺宗主屋敷として利用され、嚴重に方形区画の土塁や堀、柵に囲まれた。東西二二〇メートルほどの外郭のなかには第二郭と内郭がある。中央には今も二基の築山をようする庭園が残る。それを囲む内郭北東隅の土塁は幅六〜八メートル、断面U字形の堀は幅五・四メートルある。土塁の南北長は一二六メートルを計る。堀の北端部は江戸時代前半に埋められたが、南東部は今でもよく残る。

七 中世末・近世初め

北東部にある山科大塚・小山石切丁場は、安土桃山から江戸時代はじめに伏見城などの石垣材採取地だったことが最近わかり、二〇一五年に埋蔵文化財包蔵地として台帳に記載された。小山と大塚の山中、行者ヶ森を中心に花崗班岩や石英班岩の露岩があるところである。石の中には、大名と関係する刻印石、巨石を一直線に割り、平らな面を得るために設けた矢穴列がつくものがある。

刻印石は一九七七・七九年に二つが確認されていたが、その後の二〇一二年になってから地元の人たちが探索した結果、現在、刻印が大塚で一六石、二二箇所。小山で一石が見つかっている。刻印には、一文字一星の



図四 山科大塚・小山石切丁場刻印石

刻印が多く、毛利家四組専有の一つかと思われる。二が付属するものもある（図四）。さらに、四角のなかに○の四つ目結は若狭京極家所用であろうか。

平四つ目結、角立ち四つ目結のほか、少数だが、十、一がある。音羽川沿いの小山にある白石神社のご神体となる巨石にも刻印がある。行者ヶ森のちょうど東麓、音羽山にはさまれた川谷の岸には転石が積み、中に慶長初期の古い矢穴があり、石をもちだしはじめたのはこれ以前となろう。周囲にも矢穴石が散らばる。一旦、ここに落とし溜め、川をくだったのだろう。大塚の東、行者ヶ森の山頂をやや下った葎ヶ谷A地区の調査では、矢穴以前の花崗岩ブロックを採取したであろう窪みがある。これは主に豊臣伏見城指月のものだろう。その南には矢穴石が広がる。矢穴の形は五時期にわかれる。矢穴での石切りが盛んになったのは関ヶ原合戦以降である。矢穴の山科Ⅰ・Ⅱ期は豊臣伏見城木幡山の慶長期、Ⅲ期が元和・寛永期に対応しよう。つまり、切石石材が最も多く使われた一番の候補地は徳川氏が再建した伏見城の石垣ということになる。石切丁場は旧近江道、最短で近江に抜ける中間点でもあった。この街道に直結する石出し口は現在の天神社あたりになろう。

伏見城は徳川家康が再建したが、元和九年（一六二三）に廃城となった。大塚・小山の石切丁場から伏見城にぞくぞくと運びこまれた石材は、廃城を機に二条城や淀城などに転用され運び出されたことが、石材と刻印からわかってきた。長さ一二キロほどの山科盆地をほぼ縦断した石は、京の町のあちこちに散らばったのである。